

## 『セルボーンの博物誌』における〈自然のエコノミー〉

生田省悟

ドナルド・ウスターは近代から今日に至る環境思想の系譜を辿った名著『ネイチャーズ・エコノミー』（一九七七年）において、十八世紀の二人の人物を現代エコロジ思想の源流に据えてみせた。すなわち、イギリスの小村セルボーンに住まった牧師補ギルバート・ホワイトとスウェーデンのあまりにも著名なリンネである。その上でウスターは、彼ら二人の業績とその意義をそれぞれ、「アルカディアでの科学」および「理性の帝国」なる標題のもとで鋭く論じている。<sup>1)</sup>

しかしながら、その議論からは、特にホワイトについて従来の評価——現代では失われてしまった、人間と自然との調和に満ちた関係を謳うもの——が基本的に踏襲されたという印象を抱かざるをえない。また、厳然として存在していたはずのリンネの影響に関して、十分な検討が加えられていないのも残念なことである。確かに、ホワイトの著作『セルボーンの博物誌』（一七八九年）は全篇にわたり、著者自身と生まれ故郷である小村の自然との親密な交渉を伝える記述に溢れてはいる。ただ、他方でホワイトが当時の博物誌の動向に並々ならぬ関心を抱いていたこと、周縁に置かれた一介の博物誌研究者として自らが採るべき方向を強く意識していたことは紛れもない事実である。それは、頻繁に繰り返されたリンネなどに対する言及や個人的心情の吐露からも容易に理解されるであろう。このような側面を捉えたとき、ホワイトの博物誌研究を時代の文脈にどのように位置づけるべきなのか、さらには、それが担った役割とは何であったのかを改めて検証する必要があるはずである。

したがって本稿は、十八世紀の博物誌研究に君臨したリンネが詳細に論じた概念、〈自然のエコノミー〉(oecomy of nature) を座標軸として『セルボーンの博物誌』の所説を考察し、ホワイト的な認識のありかを探るこ

とを目的とする。

\*

博物誌研究者としてのリンネの活動がいわゆる〈性の体系〉の提唱、自然界の体系化、二名法の考案をはじめとして、広範囲に及んでいたのは周知の事実である。彼の業績なくしては、博物誌が学問としてこの時代に認知されることはなかったと言つても誇張ではない。数多いその著作はいずれも、十八世紀における博物誌研究の進展に強い影響力を発揮したが、とりわけ注目されたもの一つに「自然のエコノミー」がある。この論文は、次のような書き出しで始められている。

自然のエコノミーなる言葉によつて、私たちは自然界の事物に関する創造主の極めて賢明なる神慮を理解する。その神慮を通じ、自然界の事物は普遍なる目的を提示すべく、また相互に役立つべく、適切に配置されるのである。<sup>(2)</sup>

これは、「自然のエコノミー」の簡潔極まりない定義である。読み方によつては、リンネの研究のすべてが凝縮されていると考えられなくもない。しかしながら、記載された内容のより厳密な意味を知るためには、この一節が導き出された背景と過程とに立ち入つて考察する必要がある。とりわけ、「自然のエコノミー」は何を表象しているのだろうか。また、それが「創造主」の「神慮」と関係づけられている事態の根拠はどこに求められるのか。さらに、「普遍なる目的」と「相互に役立つ」という表現は何に由来するのであろうか。

ちなみに、〈エコノミー〉なる語はギリシャ語の *oikonomia* に由来する。その詳細については改めて復習するまでもないが、あえて、*oikonomia* が *oikos* (家) と *nomos* (法、掟) とを語幹とすることだけは指摘してお

かなければならない。<sup>3</sup> 〈エコノミー〉にはしばしば〈経済〉なる訳語が充てられるが、その場合、少なくとも博物誌研究の脈絡にあつては、「家」としての世界ないし自然界を統率する絶対者の〈法〉という前提が不明瞭になりかねないからである。

リンネにとつて、〈エコノミー〉はいかなる意義を有していたのか。それを正確に理解するためには、まず、リンネの著作中に直接か間接かを問わず、しばしば言及される〈平衡〉(equilibrium) という概念を手がかりとするのが有効であろう。たとえば「昆虫のための植物相」と題された論文には、次のような記述が見られる。

あらゆる動物を形成する際に、自然は自らに向けてある目的を提示したが、それと同一のことを自然は昆虫を形づくるときにも行なつた。すなわち、昆虫が多くの生物の間に適切な平衡を維持するようにとくろんだのである。あたかも籤で決められたかのように、ある昆虫は自らのために選ばれた一つの種の植物に住まい、これを食するし、他の昆虫には別の植物があてがわれる。すべての動物は自然の法に従い、それぞれが特定の昆虫を育み、宿す。昆虫の一族のあるものは、ある動物の腐肉を食料とし、他のものは別の動物のそればかりか、自らの種族のそれをも餌食とすることとする。そして、絶え間ない殺戮によつて互いに互いを攻撃するのだ。<sup>4</sup>

この一節は昆虫が自然界に果たす役割を例示したものであるが、何よりもまず、その論旨が「目的」を前提としていることに注目したい。リンネが「適切な平衡を維持すること」に絶対的な意義を認めているからだ。その経緯、さらに「平衡」の具体的な内実については、他の論文「自然の統治について」でより端的に披露される。

あらゆる植物には固有の昆虫が割り当てられている。それにより、当の植物は繁茂して、他の植物を排除するほどま

でに数を増やしたりすることがないよう抑制されるのである。そして昆虫は任務を遂行することで十分に扶助されたとき、豊富な食料を得て生活し、無数の子孫を生み出す。だが、不首尾の際は瘦せ衰え、命を落とす。<sup>(5)</sup>

「昆虫」の役割について語るリンネの主眼はすでに明らかである。彼が構想する自然界は決して静的なものではない。そのとき、かりに昆虫が存在しなかったとすれば、特定の植物が生息地を占有し、他の種が減びてであろう。しかも昆虫さえ「任務を遂行」しえなかった場合には絶滅が待ち受けている。「適切な平衡」とは、被造物が自らに定められ場から逸脱することを戒め、阻止し、さらには、それを通じて調和の維持を図るという意義が負荷された峻厳な概念なのである。

「平衡」は、一面で現代生態学に通じる要素を孕んでいると解釈されうる。実際、「平衡」を支える生物間の機能分担に関する記述が、食物連鎖の概念と完璧に重なり合っている場合すらある。<sup>(6)</sup>だが、生態学の成り立ちが基本的に生物とその生息環境および他の生物との関係性のうちに見い出されるならば、リンネの立場は、それとはかなり異質な性格を帯びていることを識別する必要がある。自然界の営みが単に生物主体の関係論的な次元で説明されていないし、「平衡」もまた、自然界に内在する自律的機構とは認識されていないからだ。

リンネにあつては、「昆虫のための植物相」に書き込まれた「自然は自らにある目的を提示した」という文脈から解説されるように、「平衡」と「自然の法」は目的論的な次元で結びついている。「自然の法」が何らかの目的を達成するために働く統御の原理であるとすれば、「多くの生物の間に適切な平衡を維持する」ことこそ、その目的に他ならないことは容易に理解される。しかも、被造物の間に働く「適切な平衡」が目的論に依拠し、「自然の法」によってもたらされるという構図からは、リンネがキリスト教の伝統的なドグマ、すなわち創造主の支配による万物の秩序を無条件に受容している事態が判明するのではないか。「平衡」が求められるのは、要

するに、それが拮抗し合う被造物を調和のうち存続させるという神の深遠かつ壮大な目的を表象するものだからである。

かくして、それぞれの動物には何百何千もの相異なる任務が委嘱されているが、それは万物の普遍なる釣り合いを維持するための、すなわち、何物もその釣り合いを超えるまでに数を増すことがないようにするための任務なのだ。あらゆる被造物には上位者と従属者が定められているのである。<sup>7)</sup>

以上のような言説に見られる露骨なまでの目的論の展開は、何のこだわりもなく、神慮に対する敬意に通じてゆく。最初に引用した論文「自然のエコノミー」の冒頭は、こうした論理とみごとなまでに重なり合い、何の違和をも与えはしない。〈自然のエコノミー〉とは、「平衡」すなわち「普遍なる目的」を実現させる「創造主の極めて賢明なる神慮」の作用態に他ならなかった。

「平衡」と「自然の法」とが目的論的に結びつくのならば、〈エコノミー〉の語幹が〈家〉と〈法〉から成るという事実はきわめて象徴的な意味合いを帯びる。「神慮」に基づく統率原理としての〈法〉と〈エコノミー〉は、〈平衡〉が実現されるべき場においては等価であった。

動物が成熟を遂げ、もはや親からの世話を不要とするやいなや、彼らはそれぞれの種に定められた法とエコノミーに従いつつ、最大限の労働と勤勉によって、自らの生の維持に従事する。しかし、おびただしい数にのぼる彼らはどこにでも生じ、糧を与えられ、彼らの間ではある定められた秩序が保たれるのだが、そうした彼らは、おのおのの種に何らかの食物を割り当て、食欲に限界を定められた創造主の驚異に満ちた神慮を目のあたりにするのである。<sup>8)</sup>

リンネの博物誌研究の方向は、「神慮」あるいは神の秩序に対する先験的かつ絶対的な帰依に規定されていた。〈自然のエコノミー〉に関わる言説もまた、そこから発せられ、そこへ回帰してゆく。

\*

では、〈自然のエコノミー〉の概念は、リンネが実際に博物誌研究を遂行する際にいかなる形式で機能しているであろうか。これについては、二つの側面が存在するように思われる。すなわち、〈自然のエコノミー〉を基盤とすることで、彼は研究それ自体が神の秩序の受容、ひいては敬虔な信仰の証しに通じると確信する一方、自然界の考察が人間中心的な実用主義ないし功利主義に通じてゆく可能性をも視野に入れていたのである。しかも、この二つの方向は、リンネが名声を博す端緒となった自然界の分類と体系化に関する一連の試みのうちにも潜んでいる。

たとえば、リンネの主著の一つとして、「自然の体系」(一七三五年初版)が挙げられるが、彼がこの著作で行なった分類と体系の構築は単なる事項の羅列ではなかった。同時代人でリンネの英訳者でもあったB・ステイリングフリートは早くもその斬新さを嗅ぎ取り、リンネの場合と比較すれば、「古典的な分類体系の効用と内実は一冊の辞書のそれに過ぎない」と断言している。<sup>9)</sup> 〈自然のエコノミー〉を介在させたとき、そうした評価はより一層妥当性を帯びるであろう。分類の課題とは、自然界の事物を単なる形態上の差異に基づいて区分する作業である以上に、生物が神慮に由来する「平衡」にいかなる次元で貢献するのかを解明し、整合性を有する仮説を提起する行為に他ならなかったからである。リンネが用いた〈体系〉(systema)は明らかに、「平衡」の現われである秩序を指示する言語としての意義を担う。

注目に値するのは、人間という種の位置づけに関わる言説であろう。確かにリンネは、人間を *homo sapiens* として「自然の体系」に組み込んでいる。人間もやはり被造物の一員である以上、神の支配からは免れえない。むしろ、万物の「平衡」を実現させるためには不可欠の要素なのだ。だからこそ、「自然の法」は「他の生物と等しい存在として、人間をその仲間を含め」ている。<sup>(10)</sup>だが、分類と体系化とを通じて、神慮に基づく秩序を明らかにすることもまた、人間に課せられた重要な責務でなければならぬ。被造物で唯一理性を付与された人間は「創造主を賛美し、称揚するために創られた」のだ。<sup>(11)</sup>だとすれば、またしても、博物誌研究の実践は神の摂理の正しさに対する信仰告白の証しに等しいという、究極の結論が導き出されることに何の不思議もない。

もし私たちが人間と外界の事物の性質に考察を加えるならば、私たちは、人間という存在の目的因が自らの周囲に見られるそれらの事物を熟視する行為にあることを見い出すであろう。それによって人間は神の力と慈悲との足跡を辿り、また、心を傾けてたゆまず熟視することで、その足跡を認識し、検証し、賛美するに至るであろう。それ以外に、至高の存在は一体いかなる目的で、人間にかくも多くの秀でた資質をお授けになられ、動物を超えた高みにまで引き上げて下さったというのか。自らに無知であり、自らの創造主をながしろにしたまま生きる輩にあっては、人間としての尊厳は失われるのである。<sup>(12)</sup>

人間は被造物であると同時に、神を称えるという格別の資格を有する。このとき、他の動物との間に厳然たる隔絶が生じている。リンネが人間に特権的な地位を想定した事態は人間と「自然のエコノミー」との間にも、ある特殊な関係を現出させずにはおかない。強烈な人間中心主義の思想が「自然のエコノミー」を自らの側に引き寄せるのだ。

リンネは、人間も自然の「普遍なる体制」に支配されるとの留保条件を付けた上で、次のように述べたことがあった。

人間は自然のための最後にして最高の臣であり、万物は人間の利用と便宜に従属する。また、人間は多くの場合において、自然によって定められた釣り合いを維持するために奉仕する。(中略)人間は植物、樹木、魚、鳥、そしてこの体系における過剰なものすべてを自らの利用のために供する。かくして厳密な平衡は保持され、無駄なものや無用のものは一切存在しないのである。<sup>(13)</sup>

あるいは、自然界のあらゆる事物が「創造主によって人間のために意図された」との露骨な論理を展開した際に、リンネは以下の結論に達している。

要するに、私たちが一連の被造物を辿り、あるものが神の摂理によって他のもののために創られたことを考察するならば、肝要なのは、あらゆる事物が人間のために創られたということに他ならない。また、とりわけこの目的により、人間は創造主の御業を称えることでその栄光を称揚すべきであり、同時に、自らの生活を好都合かつ快適におくるためにも、自らが必要とするこれらの事物をすべて享受すべきなのである。<sup>(14)</sup>

こうした言説によれば、人間の目的因は被造物を「熟視する」ことから、〈自然のエコノミー〉に基づく秩序維持のための最大責任を委託されたことへと移行する。それに応じて博物誌研究も実利的な要素を許容しなければならぬ。むしろ、自然を利用することの正当性を博物誌の側が提示したとも言えるし、博物誌がいわゆる「経

済)、あるいはリンネ的言語では「私的なエコノミクス」<sup>(15)</sup>と規定される人間の社会活動に対して「自然のエコノミー」というモデルを提供したとさえ仮定することが可能であろう。それにまつわる状況については、スウェーデンの当時の社会情勢を含め、ここで論じる余裕はない。ただ、十七世紀初頭においてフランシス・ベイコンによって提唱された合理的科学主義が標榜する人間中心主義と決して無縁でないことだけは推測できる。<sup>(16)</sup> 自然学が人類の福祉に貢献する責務を負うのならば、博物誌研究もやはり、有用性を喧伝することのうちに自己存在証明の根拠を求めたのではなかったか。リンネ自身は少なくとも、「この時代に初めて、博物誌は実的な応用と有用性なる装いをまとうにいたった」との認識を抱いていた。<sup>(17)</sup>

とはいえ、この博物誌研究の二つの側面はリンネのうちで決して相矛盾してはない。「自然のエコノミー」の正確な知識を獲得し、それを適切に利用することはいずれも、人間に課せられた務めを忠実に果たすという意味で、神の摂理にかなう敬虔な行為なのだ。揺るぎない信仰への収束。それを物語るかのように、十二版にまでおよんだ『自然の体系』の扉には、神の創造の業を称えるべく『詩篇』一〇四・二四が常に掲げられていた。<sup>(18)</sup>

リンネの研究は、それに対する共感と反発とを広く喚起してゆく。彼は字義どおりに十八世紀のヨーロッパを席卷したのである。ギルバート・ホワイトはまさにリンネと同時代を生きていたし、たとえイギリス、ハンブシヤの片田舎にあつたとしても博物誌研究の趨勢とは無縁ではいらなかった。ちなみに、イギリスでリンネ協会が設立されたのは『セルボーンの博物誌』上梓の直前、一七八八年であつた。そのような知的風土のなか、ホワイトの「自然のエコノミー」もまた、リンネを踏まえたとき、初めてその輪郭が鮮明にされる。

\*

リンネの言説と比較するならば、ギルバート・ホワイトの場合、自然界の秩序を維持すべき人間という視点が

ほとんど見られない。しかしながら、『セルボーンの博物誌』の多くの箇所からは、ホワイトが同時代の博物誌の展開を正確に把握し、それについて種々の考察を試みていた事態が窺われる。たとえば、博物誌的知見の効用と研究目的としての分類体系との関連をめぐり、極めて現実的な発言がなされたことがある。

植物学者は、それぞれの区分が曖昧な属に含まれる雑多な種についての詳細な識別法を精査する代わりに、有用な種に精通するよう努めるべきです。(中略) 自らが居住する地域の草地を改良しうる植物学者は社会にとって有益な一員となるでしょう。裸の土地に草が繁茂した芝土を生じさせることは、体系的知が詰め込まれた幾巻もの書に相当しますし、「かつては一葉の草のみが見られた場所に二葉の草」の生育をもたらす人物は、国家にとってもっとも有意義な存在であります。

(B 40)<sup>(19)</sup>

このように、ホワイトは農業生産の向上という観点から見た博物誌の実利的な側面を承知していた。彼自身は直接的な形でそれに関与してはいないものの、『セルボーンの博物誌』上梓の目的の一つが、「定住者」(“stationary men”)による、従来欠如していた「完璧この上ない郡誌」の編纂および「歴史かつ地誌にまつわる知識の境界の拡大」にあると規定されているのは注目に値する。ホワイトが見い出した自らの使命とはいわば、この著作を通じて、ある特定の地域における自然の相貌を徹底的に記述することにあつた。

ホワイトによる博物誌研究の特質を考える場合、前提として何よりも留意すべきなのは、「定住者」たる彼が、故郷セルボーン教区で長年にわたり自然観察に勤しんだという事実である。これは、当時の学界の主流からも遠く、地理的にも周縁に位置していた彼が、自らのアイデンティティを「野外のナチュラリスト」(“an out-door naturalist”) (B 1)と規定したことと決して無縁ではない。<sup>(21)</sup> 自らが居住する村の自然を遺漏なく調査すること。

これをめぐる経緯は、『セルボーンの博物誌』でしばしば掲げられる「動物の生活と習性の研究」(“the investigation of the life and conversation of animals”)とどう標語に集約される<sup>(22)</sup>。

「承知のように、動物学者はたいして意味のない記載と二、三の同義語をあまりにも安易に受け入れる傾向があります。なぜなら、すべての仕事がその人の書齋で行なわれてしまうからです。しかしながら、動物の生活と習性の研究ははるかに骨が折れる、困難な課題です。活動的で探究心の強い人、もっぱら田舎に住んでいる人々でなければやり遂げることが不可能なのです。」

(B 10)

ホワイトは露骨な形でリンネ一派の分類信仰をあてこすり、同時に自らの信念と確信とを婉曲に、それでいて明確に伝わるように語っている。したがって、「野外のナチュラリスト」との自己規定は、彼自身の限界を意識したことを意味してはいない。『セルボーンの博物誌』に「観察」(observation)にまつわる言語が頻出する事態は、この点で示唆的である。すなわち、他の研究者たちの言説と自身の観察から得られた結果と所見とを互いに照らし合わせる過程を通じて、ホワイトは厳密さに裏づけられた学問としての博物誌の確立を夢想しているのだ。実際、『セルボーンの博物誌』にはリンネをはじめ、著名な博物誌研究者に対する言及も繰り返し返されるが、これは、自らが志向する博物誌——「動物の生活と習性の研究」——に関わるホワイトの自覚を介して理解されるべきであろう。

ホワイトにおける〈自然のエコノミー〉に関しても、とりわけ問題となるのは、『セルボーンの博物誌』の根幹をなす「動物の生活と習性」がこの概念と決して無縁ではないという事実である。この標語は、〈自然のエコノミー〉が論じられる文脈でも、その語と直接に関わる形で出現する。先に引用した「植物学者」への言及箇所

と同じく稀な事例ではあるが、彼は害虫駆除をめぐる博物誌の効用を話題としたことがある。リンネ的言語とは大いに隔たっているのを指摘した上で引用したい。

この種の事柄に関するわずかばかりの知識は散逸しておりして、集大成することが求められます。そのおりは、即座に大いなる進展が得られるのはもちろんです。これらの動物「害虫」の属性、エコノミー、それに繁殖、要するに生活と習性について知識をもつことは、これらが行なう略奪を防止すべき何らかの手段を獲得するために必要な第一歩なのです。

(P 34)

あるいは、「生活と習性」が「生活の様態」(“mode of life”)と言い替えられるならば、「しばしば私は、これらのコオロギのエコノミーを調査し、その生活の様態を研究するために出かけたものでした」(B 46)といった記述も指摘される。こうした事実を踏まえたとき、〈エコノミー〉と「生活と習性」ないし「生活の様態」は同一次元に配置され、等価とみなしうる関係性を有している。しかしながら、この、リンネの場合には想定されなかった現象は何に起因するのであろうか。それに、〈自然のエコノミー〉なる概念が「野外のナチュラリスト」の自然観察とどのように交錯するのであろうか。

\*

「セルボーン博物誌」は二人の人物に宛てた書簡をまとめたものであるため、いずれの話題についても論議が徹底しているとは限らない。とはいえ、読み過ぎすべきではない見解が随所にちりばめられている。〈自然のエコノミー〉に言及した記述は、たとえば次のような(後にダーウインにも影響を与えたとされる)箇所に求め

られる。

洪水に繰り返し襲われる土地は常に瘦せています。恐らくその理由は、ミミズが溺死するからだと思われます。まったくもって取るに足らぬ昆虫や爬虫類でさえ、自然のエコノミーにあつては、無頓着な人間が承知するよりもはるかに重要な意味を持つているのです。注意を引く対象とはなりえないほどの微小さ、数の多さ、多産能力のゆえに、こうした生き物は強力な作用を及ぼします。ミミズこそ外見は小さく、自然の連鎖の中の卑しむべき環ではありますが、もしこれが失われたならば、悲しむべき空隙がもたらされることでしよう。

(B 35)

この一節が、〈秩序〉ないし〈平衡〉に関するリンネの観点を基本的に踏襲するものであることは疑いの余地がない。しかしながら、「悲しむべき空隙」(“a lamentable chasm”)なる表現を含む語りはここでもやはり、ホワイトがリンネとはかなり異質な方向に傾斜していることを予感させる。「自然のエコノミー」を維持する「ミミズ」それ自体へ向けられたホワイトの慈愛とも言うべき感情が負荷されているからである。ホワイトは「ミミズ」のうちに、秩序維持に貢献する役割と同時に、「無頓着な人間」には理解しえない、生の実質を有する存在を発見したので。

何らかの感情を喚起させずにはおかない言語は、観察の現場にあつても反復される。ホワイトは、夏、暑さを避けては池に群れ集う牛たちについて、次のように述べたことがあつた。これは、ホワイトがごく親しい家畜にさえ、時間をかけて視線を注いだことを伝える点で興味深い報告でもある。

池の中では蠅の攻撃もそれほどではありませんし、水の涼気を吸い込み、あるいは腹まで、あるいは脚の中ほどまで

浸かりつつ、朝の十時ころから午後の四時ころまで反芻を続けては慰めを求めるのです。そして、その後は再び食事に戻ります。このように一日の大半を過ごす間、牛たちは大量の糞を落とします。糞には虫が付きます。すると魚に餌が供給されることになりますが、もしこの偶然がなければ、魚は餌に不自由するでしょう。かくして偉大なエコノミストたる自然は、ある動物の気晴らしを他の動物の糧に変えるのです。

(P 8)

この一節で指摘されるように、ホワイトは「偉大なエコノミストたる自然」と牛たちの「気晴らし」(“recreation”)との接続を凝視している。リンネ的な意味での「平衡」はむしろ背景に退き、ホワイトの力点が「自然のエコノミー」のもとで営まれる動物の生態を克明に捉え、言語化することへと移行しているのだ。個としての牛が見せる一日の様相から発せられた「気晴らし」とは、文字通りに、牛たちが生きる主体であるとの理解に基づく表現ではなかったか。

こうした観点にこそ、<sup>23</sup>「自然のエコノミー」の性格づけにおけるリンネとホワイトの決定的な差異が現われてくる。繰り返して述べるならば、リンネの場合、「自然のエコノミー」には、秩序からの逸脱を禁止する法としての意義が託される。彼の論文「自然の統治について」(表題自体が論点を明示している)の末尾が当然の帰結として述べるように、「自然はみごとに統制の取れた国家に類似」しているものであり、全構成員の存在意義は、その国家維持に奉仕することにある。すなわち、「不利益を生じさせる過剰をすべて矯正し抑制する」役割が義務として課せられていたのである。

一方、自ら聖職者であったホワイトもリンネに劣らぬほどの敬虔な信仰を抱いていた。「セルボーンの博物誌」には神を称える表現が頻出するのも事実であるし、敬愛してやまなかつた先人で同じく聖職者でもあったジョン・レイの業績に強い影響を受けた痕跡をも示している。ホワイトにとって、やはり、自然界における神の秩序を

維持する原理としての〈自然のエコノミー〉が博物誌研究の主要な課題であったことは疑いえない。しかしながら、彼はリンネの厳格な教条主義を選択することを受け入れなかった。ミミズや牛に生の主体を認める立場は、生物を義務で、そしてときに罰則で拘束する解釈からは遠く隔たっている。しかも、同趣旨の発言が「爬虫類の四肢」をめぐって繰り返されたことさえあった。「このように取るに足らぬ爬虫類の四肢に關しても、神の摂理のエコノミーは何と驚異に満ちておりますことか」(P17)といった率直なもの言いからは、底知れぬほど深い愛を生物に注ぎ、その生のありかたに配慮する神に向けられた感謝の念しか感じられはしない。〈エコノミー〉が〈自然〉を経由することなく、「神の摂理」と直結しているからだ。

ホワイトが博物誌研究の歴史にもたらしたものは、まさに観察という行為に明確な意義を付与したことであった。「野外のナチュラリスト」として「動物の生活と習性の研究」に拘泥した事実を敷衍するならば、生物が示す多様な相を正確に把握しない限り、それを支える根源たる創造主の偉大さは測りえない。生物が互いに関係し合うと同時に、それぞれ独自の豊かな生を営むことが実際に確認できてはじめて、〈自然のエコノミー〉の意義も立証されるのではないか。精緻な観察の継続こそが、〈自然のエコノミー〉の普遍性——あらゆる生物が営む生を保証し、育む基盤——を知る最善の方法なのである。

D・E・アレンはホワイトの意義について、「大半の人々が単に収集にとどまっていた時代にあつて、ホワイトが忍耐強い観察を好んだこともまた、はるかに時代に先駆けるものであつた」と述べた。<sup>(25)</sup>この評価は妥当なものである反面、「セルボーンの博物誌」の質を必ずしも的確に把握してはいない。むしろ、この著作からはホワイト自身が「収集」に動しんだこと、また、この行為がリンネの言う「分類／体系化」の準備段階に相当することさえ自覚されていたことさえ窺われる。しかも、自然界を貫く神の秩序を証明するという博物誌の存在意義からすれば、「観察」は「分類／体系化」と共通の目的を戴いたのである。両者の相違点は結局、〈自然のエコノ

ミーをいかなる次元で理解するかという問題に帰着する。ホワイトは動物の生を育む原理として、これを観察の現場から明らかにしたのであった。

ひたすら時代の主流に追従することのみ終始するのなら、周縁に置かれた研究者には何の存在価値もない。観察に裏づけられた視座から自然のエコノミーの現実態を正確に読み説くこと。これは、「野外のナチュラリスト」が時代の先端を行く学問たる博物誌の発展に対して貢献できる唯一の積極的な方法に他ならなかった。

\*

ここで、セルボーンの暮らしにおける「エコノミー」について付言すべきであろう。ホワイトが村人の生活を記述する際に「エコノミー」概念を導入した例は「燈心草」の製造と消費が話題となった箇所限定され、それも、「家庭経済に関するごく素朴な事例の詳細」(“the detail of a very simple piece of domestic oecomy”)、あるいは「常に最悪の節約家である極貧の者たち」(“very poor, who are always the worst oeconomists”)のような類でしかない。しかも、こうした箇所ですら、「エコノミー」の語源はもとより、秩序が直接問題とされてはいないのだ。村人に眼を向けるとき、彼の関心はもっぱら彼らの暮らしぶり、すなわち「エコノミー」の様態そのものにあつた。

この燈心草を焼けるほどに熱い脂肪や獣脂に没す際には、多少の熟練が求められます。ですが、そのこつは練習すれば身につくでしょう。勤勉なハンプシヤの労働者の妻は几帳面で、金をかけずに脂肪を手に入れます。ベーコン用の壺の滓を蓄えて、このために使うのです。そして塩分が多く含まれていれば、滓を天火に入れて、塩を底に沈殿させます。

『セルボーンの博物誌』における村人の話題はどれも、ほぼ、これと同種の傾向を帯びると考えてさしつかえない。すでに指摘したように、〈自然のエコノミー〉を維持すべき存在としての人間の役割はホワイトの考慮外であったと言える。だとすれば、こうした部分の適切な読み方とは、「動物の生活と習性」に対するのと等質な視線の働きを理解することではないか。ホワイトは対象が何であれ、すべてセルボーンという村に生きるものという視座から見つめており、語りの文体に相違は一切生じてこない。

全篇に通底する、この生きるものという認識は〈自然のエコノミー〉と生物学的な次元の〈生態学〉<sup>(26)</sup>との接続の有無にもまして、『セルボーンの博物誌』を評価する際の規範となりうる。ホワイトの言説のすべてが小村におけ日常の質へと収斂してゆくからだ。自らを「定住者」と規定したように、ホワイトは特定の〈場〉に根づくことが帰属感を育む過程に他ならないことを理解する。しかも、生物の多様な営み、村人の暮らしを眼のあたりにするとき、帰属感は、同一の空間を共有する存在のうちにも等しく予感される。だとすれば、『セルボーン博物誌』において究極的に前景化されたのは、〈自然のエコノミー〉に支えられつつ、生の持続を許容する〈場〉としてのセルボーンそれ自体ではなかったか。

\*

観察を通じて言語化された人間と生物との生活の場、すなわち両者が織りなす共同体。ホワイトのうちにエコロジー意識の萌芽を認めたワスターをはじめ、研究者の多くがこのような共同体としてのセルボーンの意味をさまざまに指摘している。<sup>(27)</sup> 〈エコノミー〉の言説が何を語っているかを辿った場合にも、やはりホワイト的な〈共同体〉感覚に行きあたる。このとき、問われるべきなのはむしろ、この感覚を読みとってしまふ読者の側の視点

なのかもしれない。ウスターがいみじくも「アルカディア」と冠したように、回帰不能な過去に向けられる甘美な郷愁がホワイトの言説によってかき立てられたからなのか。それとも、ホワイトの実践が自然と人間との再定位を模索する現代エコロジー思想、たとえば「バイオリージョナリズム」(bioregionalism)<sup>(28)</sup>などに対するモデルとして、何らかの可能性を示唆しているからなのか。こうした疑問を厳密に吟味し、答えを模索すること。それは、〈自然のエコノミー〉とは異質の〈エコノミー〉に支配され、特定の場所に暮らすという感覚すら薄らいでしまった現代にとって決して無意味な試みではない。「セルボーンの博物誌」のテクストは、読者に向けて今も開かれているのである。

註

- (1) Donald Worster, *Nature's Economy: A History of Ecological Ideas*, 2nd ed. (1977; Cambridge: Cambridge UP).
- (2) "The Oeconomy of Nature," *Miscellaneous Tracts Relating to Natural History, Husbandry, and Physick*, trans. Benjamin Stillingfleet (1775; New York: Arno P, 1977), p. 39. なお、リンネが編んだ論集に収録されたほとんどの論文の著者名はリンネの弟子たちとされているが、実質的にはすべてリンネ自身が執筆したか、大幅に手を加えたというのが真実であるらしい。したがって、本稿で言及する論文はすべて、リンネによるものとみなされている。
- (3) 〈自然のエコノミー〉なる語の由来については、Worster, p. 37を参照。
- (4) "The Flora of Insects," *Selected Dissertations from the Aemouiales Academiae*, trans. F. J. Brand (1781; New York: Arno P, 1977), p. 355. なお、当時の自然神学のありようを伝える代表的な著作として知られるWilliam Derham, *Physico-Theology or, A Demonstration of the Being and Attributes of God from His Works of Creation* (1714; New York, Arno P, 1977), chap. x, p. 171には、「かくして動物界の均衡は、あらゆる時代を通じて一定に保たれている。また、すべての動物の数の増加と、それらの寿命との間の、ある精妙な調和や適切な釣り合いにより、世界はあらゆる時代を通じて健全であり、過度に動物が住まうことはない。」とある。これは、リンネの博物誌研究と自然神学との直接的な繋がりを示す有力な根拠となりうる。ちなみに、「セルボーンの博物誌」にも、テラムに対する複数の言及が見られる。

- (5) "On the Police of Nature," *Selected Dissertations*, p. 140.
- (6) 同書註<sup>24</sup> "On the Police of Nature," pp. 145–6; "The Oeconomy of Nature," pp. 113–4 参照。
- (7) "On the Police of Nature," p. 146.
- (8) "The Oeconomy of Nature," p. 95.
- (9) Benjamin Stillingfleet, "Preface of the Translator," *Miscellaneous Tracts*, p. xxxiii.
- (10) "On the Use of Natural History," p. 4.
- (11) "The Oeconomy of Nature," p. 126.
- (12) "On the Use of Natural History," p. 14.
- (13) "On the Police of Nature," p. 158.
- (14) "The Oeconomy of Nature," p. 124. *リッセン*の認識は何もリッセン一人のものではなく、当時の信仰／博物誌の基本文法であつたことは述べられている。さきほど John Ray, *The Wisdom of God manifested in the Works of Creation* (1691); New York: Arno, p. 175 には、「*「」のすべての可視世界は人間のために創られ、人間は創造の目的である*」と書かれている。レイは十七世紀後半を代表する博物誌研究者としてリッセンに影響を与えたばかりか、ギルバート・ホワイトからも深い共感と敬愛とを寄せられた人物であつた。
- (15) "On the Use of Natural History," p. 7 において、リッセンは「自然界の事物を人間の利用のために供することを教える学問」を私的私的なエコノミクス (PRIVATE ECONOMICS) と呼ぶと述べている。
- (16) これに関する経緯については Worcester の他、ウォルフ・レベニス (山村直資 訳) 『自然誌の終焉』(法政大学出版局、一九九二年) などが詳しい。
- (17) "On the Use of Natural History," p. 15.
- (18) 註 (14) で言及したレイの著作の第一部は聖書の当該箇所に基づいて議論が進められている。レイとリッセンの影響関係にとまらず、当時の博物誌研究の基層を知る上で、注目すべき事態であらう。
- (19) 「セルボーンの博物誌」からの引用は Richard Mabey, ed., Gilbert White: *The Natural History of Selborne*, (London: Penguin, 1977) による。なお、テインス・ハリントン宛書簡は B、トマス・ペナント宛書簡は P として表記し、書簡番号は数字で示してある。たとえば (B 40) とは、ハリントン宛第四〇書簡を意味する。
- (20) "Advertisement," *The Natural History of Selborne*, p. 3 & p. 4.

- (21) 「野外のナチュラリスト」および、以下に続く「動物の生活と習性」、「観察」については、「金沢法學」第四十一巻第二号(一九九九)所収の拙稿参照。
- (22) この表現は『セルボーン博物館』において、他に四回用いられている。ただし、これがホワイトの創見であるとは必ずしも断言できない。ジョン・レイの *The Wisdom of God manifested in the Works of Creation* (註14) p. 329 に、「冷たい元素のうち常に常に生活し、群れ集う宿命にまよった魚類」(“Fishes, which were to live and converse always in a cold Element”) とどう記述が見られるからである。
- (23) “On the Police of Nature,” p. 164.
- (24) 註(14) (23) でも触れたとおり、ホワイトはレイの著作に言及したばかりか、リンネと同様に繰り返しその名前を挙げている。しかも、リンネに対するのとは違って、常に肯定的な評価を行なっている。
- (25) D. E. Allen, *The Naturalist in Britain: A Social History* (London: Penguin, 1976), p. 50.
- (26) “oekologie” なる語がドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルによつて造られたのは一八六六年、イギリスにおける“ecology”の最初の用例は一八九六年である。
- (27) Worster, chap. 1. 他には、たとえば Mabey, pp. xvi-xvii は「教区」(parish) がホワイトの場合、「人間と同様に野生生物をも包括する概念」であると指摘し、その意義について興味深い議論を展開している。
- (28) ハインオリーショナリスムのことには、主として以下を参照：Gary Snyder, *The Practice of the Wild* (San Francisco: North Point P, 1990) ; M. E. Zimmerman, et al. eds., *Environmental Philosophy: From Animal Rights to Radical Ecology*, 2nd ed. (New Jersey: Prentice-Hall, 1998) ; M. V. McGinnis, ed., *Bioregionalism* (London: Routledge, 1999).